Roman Holiday and Byron

Teruaki J. I. TORIGOE

Keywords: *Roman Holiday*; Roman holiday; Byron; Dalton Trumbo; Coliseum

Abstract

The 1953 film, *Roman Holiday*, is still widely loved here in Japan but viewers are rarely aware that its title is based on the phrase, "butchered to make a Roman holiday," which is found in Byron's *Childe Harold's Pilgrimage*. An article published here, which discovered this connection, failed to grasp the full implication of the phrase, which means "enjoyment or profit derived from the suffering or discomfiture of others."

In this essay I have focused on the following three aspects relating to this phrase of Byron's:

1. The relations of this phrase to the story of the film, *Roman Holiday*
2. The relations of Byron's views of the Coliseum, on which the phrase is centered, and the film, *Roman Holiday*
3. Byron's way of thinking and that of Dalton Trumbo, who wrote the screenplays not only of *Roman Holiday,* but also of *Spartacus*

Regarding the first aspect I assert the following:

(1) To analyze the film we need to pay attention not only to "enjoyment", but also to "profit" in the meaning of the phrase "Roman holiday"

(2) The hero of the film, Joe the news reporter, attempts to make a "Roman holiday" in the sense of acquiring a $5,000 profit by getting a scoop on the trusting princess

(3) The princess also attempts to make a "Roman holiday" not only in the sense of deriving a day's enjoyment at the expense of her entourage and her country's embassy staff, but also in the sense of discarding her duty of future ruler and marrying the man she loves, the news reporter

(4) *Roman Holiday* is an appropriate title as these two "Roman holidays" are in progress in the film

(5) Both Joe and the princess eventually decide not to make a "Roman

holiday," and this negation of theirs moves the viewers

Regarding the second aspect—the relations of Byron's views on the Coliseum to the film, *Roman Holiday*, I state:

(1) It was a new way of Byron's to look at the Coliseum from the viewpoint of the slave-gladiators, who were killed for the enjoyment of the Roman spectators
(2) Without this change of viewpoint by Byron, the film *Roman Holiday* could not have been made, as it was inspired by the phrase "butchered to make a Roman holiday"
(3) Figuratively speaking, the princess is in the position of a victim in danger of being killed in the arena as her escapade may well have been scandalously reported, whereas her social ancestors in Imperial Rome were at the center of the spectators in the Coliseum
(4) Modern people, who expect to enjoy the princess's scandal at her expense, are descendants of the people who made a "Roman holiday" at the Coliseum in the past

Regarding the third aspect—Byron's way of thinking and that of Trumbo—I assert the following:

(1) Both of them saw Ancient Rome from the viewpoint of the slave-gladiators
(2) Both thought that in order to be free, slaves should create their own rebellion
(3) Both trusted the power of language and legend

『ローマの休日』（？）とバイロン

鳥越輝昭

はじめに

映画『ローマの休日 *Roman Holiday*』（1953）は、半世紀ほど前に作られた映画だが、日本ではいまも毎年テレビで放映され続けている人気作品である。しかも興味深いことに、本稿の執筆時点（二〇一二年七月）では、この映画の題名「ローマの休日」をもじったテレビ・コマーシャル「龍馬の休日」が放映されている（ソフトバンク社）。また、高知県でも、「リョーマの休日」（＝龍馬の休日）という観光キャンペーンを展開し、着物姿の知事がスクーターの後部座席に若い女性を乗せたポスターを制作したとのことで（『日経新聞』二〇一二年五月一六日、「春秋」欄）、これは映画の題名と場面とを利用したものである。どちらの企画も映画『ローマの休日』のもじりであり、この映画作品がもじりの対象となるほどに日本人のあいだに定着していることを示す例である。

ところが、このようにもじりの対象とされた映画の邦題『ローマの休日』そのものについて、評論家の呉智

英から誤訳だとの興味深い指摘がなされている。呉は、「この名画の邦題は原題を直訳した一種の誤訳である。正しくは『はた迷惑な王女様』か『王族のスキャンダル』としなければならない」という（『産経新聞』「断層」、二〇〇九年六月十八日）。

呉の論拠は、この新聞コラム執筆に先立つ書籍『ロゴスの名はロゴス』（双葉文庫、二〇〇一）のなかに、やや詳しく述べられている。呉の論理展開は、つぎのようなものである。―この映画の原題 *Roman Holiday* は、成句の“Roman holiday”をもじったものだが、英和辞典によれば、“Roman holiday”とは、「他人を犠牲にする娯楽。古代ローマで奴隷や捕虜を闘わせ、これを観戦するのを休日の娯楽としたことから。バイロンの『ハロルド家の御曹司』中の Butchered to make a Roman holiday（〝ローマの休日〟をするために殺戮された）」を指している。この映画は、「王女様の可愛いわがままに周囲の人は翻弄されたのだから、他人を犠牲にする娯楽と言えなくはない。」そしてまた、「王女様と新聞記者の恋愛事件を、まわりのみんなが一種のスキャンダルとして面白がっている」と考えることもできる（pp. 112–23）。

呉のコラム「断層」での指摘に関連しては、その後、インターネット上の書き込みがいくつかなされ、そのなかには、呉を支持するかたちで、日本語の「ローマの休日」に相当する英語は“a holiday in Rome”であって、“Roman Holiday”ではないだろう、との指摘もなされている。これは、正しい指摘である。

わたくしも、*Roman Holiday* という映画の題名は「ローマの休日（＝ローマでの休日）」を指すのではないという呉の立場を支持する者だが、以下の拙文では、呉の議論に欠落している重要な論点をいくつか提示してみたい。わたくしの論点は以下のようなものである。

（一）王女の“Roman holiday”的行動について、「可愛いわがままに周囲の人は翻弄された」というだけでない、別の側面があること
（二）王女の恋の相手役となる新聞記者の行動についても、王女の行動に劣らず、“Roman holiday”の側面があること
（三）この映画は王女と新聞記者が最終的に“Roman holiday”を断念するものであること
（四）“Roman holiday”は、王女と新聞記者だけでなく、大衆の行動原理にかかわるものであること
（五）成句“Roman holiday”における見方の転倒が、映画*Roman Holiday*に深く関わること
（六）成句の作者バイロンと映画*Roman Holiday*の脚本家とのあいだに精神的類似があること

なお、以下の論述にあたって、問題の映画の題名は*Roman Holiday*と記述して、邦題の『ローマの休日』は避け、成句は“Roman holiday”と記述することにする。

一　*Roman Holiday*と“Roman holiday”

「はじめに」でふれたように、*Roman Holiday*という映画のタイトルは、ほぼ間違いなく“Roman holiday”という成句に基づくものである。このことに気づくだけで、この映画に関する解釈には深まりが生じるから、呉智英『ロゴスの名はロゴス』（二〇〇一）の指摘は大きな功績だといえる。

*Roman Holiday*が成句“Roman holiday”のもじりであることは、すぐれた『ローマの休日』論である北野

圭介『大人のための「ローマの休日」講義』（平凡社新書、二〇〇七）にも指摘されていない特徴である。北野は、この映画には、（一）お姫様の冒険譚、（二）少女の成長物語、（三）自分の人生に対する女性の覚醒物語という、重要な側面があることを挙げているが、王女と“Roman holiday”との関連にはふれていない。

映画 *Roman Holiday* が成句“Roman holiday”をふまえているということは、映画のなかの主要な登場人物たちの行動が批判的に捉えられているということを意味している。そして、この映画のいちばん重要な特徴は、かれら登場人物たちが、そういう“Roman holiday”的行動を最終的に改める点にある。この映画がもたらす感動も、じつはかれらが“Roman holiday”的行動を改めることと深く関わっている。

わたくしが「主要な登場人物たち」と呼んでいるのは、王女、相手役の新聞記者、新聞記者と行動をともにする写真家の三人である。だが、写真家は主役である新聞記者のリードに従いながら同一行動をとるので、以下では、おもに王女と新聞記者のふたりを中心に論述を進めてよいだろう。

呉智英の指摘にもう一度遡ってみよう。呉が主張したのは、この映画は「王女様の可愛いわがままに周囲の人は翻弄されたのだから、他人を犠牲にする娯楽と言えなくはない」ということ、そしてまた、この映画は「王女様と新聞記者の恋愛事件を、まわりのみんなが一種のスキャンダルとして面白がっている」と考えることもできる、ということだった。その際に呉が論拠としたのは、日本の英和辞典の記述である。そこには、「他人を犠牲にする娯楽。古代ローマで奴隷や捕虜を闘わせ、これを観戦するのを休日の娯楽としたことから」、と書かれている。呉は英和辞典のこの記述を論拠にしたので、関心が「他人を犠牲にする娯楽」に集中し、その結果として、（一）王女のわがままは他人を犠牲にする「娯楽」だったこと、（二）王女と新聞記者との恋愛

事件をまわりの人間たちが「娯楽」にしている、という二点を指摘することになった。この第一点は、なるほどあきらかに正しく、きわめて重要な指摘である。しかし、わたくしの考えでは、呉の主張には重要な見落としがある。その見落としは、典拠が英和辞典だったことから生じている。

成句“Roman holiday”を、英和辞典でなく、もっとも信頼できる英英辞典 *The Oxford English Dictionary* および *The Shorter Oxford English Dictionary* で調べると、「他人を犠牲にする娯楽」だけでなく、もうひとつ、「他人を犠牲にする利益」という重要な意味があることがわかる。すなわち、つぎのとおりである。

> 傷害や死から娯楽や利益が得られるような機会 an occasion on which entertainment or profit is derived from injury or death（*The Oxford English Dictionary*, 2nd. ed., 1989）
>
> 他の人々の苦しみや当惑から得られる楽しみや利益（となる出来事）（an event occasioning）enjoyment or profit derived from the suffering or discomfiture of others（*The Shorter Oxford English Dictionary, 6th ed.*, 2007）
>
> 〔傍点は筆者〕

これらの語釈に見られる、「傷害や死から娯楽や利益が得られる」や「他の人々の苦しみや当惑から得られる楽しみや利益」のなかの「利益」の方に注目して、映画 *Roman Holiday* を見直してみよう。すると、この

映画のなかには、まさに他人の苦しみや当惑から利益を得ようとした重要人物たちがいることに気づく。その人たちこそ、主人公である新聞記者と彼と行動をともにする報道写真家である。この新聞記者は、自分の本業を隠し、無邪気な王女を騙して、ローマの街で一緒に遊び回らせ、友人の写真家による写真を添えて、スクープ記事を書いて五千ドルという利益を得ようとするのである。王女は、映画の終わり近くで、ローマの街を一緒に遊び回ったふたりの男たちがじつは報道関係者だったことを知ったときに、少なからず「当惑」する。そして仮にこの新聞記者が記事を書かないことに決めなかったなら、王女はこのスキャンダルによって「苦しみ」を経験したに違いないのである。つまり、新聞記者と写真家も王女を犠牲として「利益」を得ようとするという意味での“Roman holiday”を過ごすのである。

また、この映画では、呉智英の指摘どおり、王女は同行の宮廷関係者たちや大使たちを犠牲にして楽しむという意味での“Roman holiday”を過ごす。だが、それだけではない。王女は、王位継承者としての義務を捨てて、好きな男（新聞記者）との結婚を望む。それもまた、他人の犠牲によって「利益」（＝私利）を得ようとすることである。王女は、この意味でも“Roman holiday”を手に入れようとするのである。

この映画のなかでは、新聞記者の側と王女側の両方で“Roman holiday”が同時に進行してゆく。したがって、題名として“Roman Holiday”ほど適切なものはありえない。

他人を犠牲にして「利益」を得るという意味でのふたつの“Roman holiday”が始まろうとする場面に注目しよう。この場面では、誘惑者（＝一時的な悪魔）としての新聞記者が、王女という獲物を罠に掛けて、“Roman holiday”を手に入れようとし、王女もまた、その罠に掛かって、“Roman holiday”（他人を犠牲にする娯

楽と利益〕を手に入れようとする。その重要な場面が、つぎの一連の台詞である。新聞記者ジョー・ブラッドレーは、スクープの対象として狙いを付けた王女の跡を付けて行き、スペイン階段でジェラートを食べている王女に、偶然に出会ったふりをして、声を掛ける。短時間話しているうちに、王女が立ち去ってしまいそうなので、ジョーは巧妙に説得する。台本[1]を忠実に翻訳してみよう。

王女
もう、タクシーに乗って帰ることにします。

ジョー
〔ひきとめようと必死。説得しようとして〕でもね、帰る前に、少しだけ自分のために時間を使ってみては、どう。

王女
〔誘惑されて Tempted〕もう一時間くらいなら……

ジョー
冒険をしてみては、どう。まる一日使って。

王女
〔誘惑が強まる The temptation growing stronger〕いつもしたかったことが、いくつかできるかもしれないわ。

ジョー
どんなこと。
王女
あなたには想像できないわ。わたし、したいかぎりのことをしたいわ。一日中。
ジョー
髪を短く切ったり、ジェラートを食べたりすることかい。
王女
そう。それに、わたし、……街路脇のカフェの席に座ったり、……お店のショーウィンドーを覗いたり、……雨のなかを歩いたりしたいの。あなたには、たいしたことには思えないでしょう。〔王女は、ジョーの顔の表情を見る。ジョーは真剣に耳を傾け、……王女のしたいことがすべて素朴なので、思わず少し心を打たれる〕
ジョー
〔半分自分自身に〕すごくいいじゃないか。こうしようよ。そういうことを全部やろうじゃないか。ふたりで一緒にさ。
王女
でも、お仕事をしなくていいんですか。
ジョー

仕事？とんでもない。今日は「ホリデー」さ（Work? Nah! Today's gonna be a holiday）。

〔pp. 104–06. 傍点は筆者〕

この場面の台本を見ると、ふたつの点が際立っている。ひとつは、ト書きのなかに、明瞭に“tempt（誘惑する）”と“temptation（誘惑）”という言葉が使われていることである。もうひとつは、ジョーの最後の台詞のなかで「今日は『ホリデー』さ」という発言がなされていることである。

まず、「誘惑」について思い出しておこう。いうまでもなく、西洋文化のなかでは、伝統的に悪魔は誘惑する存在（the tempter）と認識されてきた。この場面では、ジョー自身も悪魔として行動している、あるいは、悪魔の手先として行動しているといってよいだろう。ジョーは、ここで、甘い「誘惑」によって王女をスキャンダルに巻き込み、王女の行動をスクープ記事にしようとしているからである。そして王女は、その誘惑に一旦屈するのである。

映画 *Roman Holiday* については、オードリー・ヘップバーン（Audrey Hepburn, 1929–93）という新人女優の初々しい輝きもあって、観客は若い王女が羽目を外し、かなわぬ恋をする側面に目を奪われがちである。しかし、この映画は、もう一方で、新聞記者ジョーが、純真な王女の好影響によって、堕落状態から再生する物語という面を濃厚に備えていることに十分注目すべきだろう。ジョーの堕落については、映画の冒頭近くで、この新聞記者がはじめてスクリーンに姿を見せる場面で、深夜の掛けトランプをしているのが重要である。故国アメリカを離れてローマに滞在しているこの新聞記者は、直接には、この賭け事で夜更かしをしたために、

翌朝の王女の記者会見の時間を寝過ごしてしまう（実際には記者会見はキャンセルされていたのだが）。その意味でも、この記者は職務に忠実でいられない程度に堕落しているわけである。しかし、それよりも重要なのは、この記者は、賭け事を繰り返して、編集長にも借金するような経済状態になってしまっていることである。しかも、この記者はローマでの特派員生活が嫌になり、アメリカに帰りたいらしい。それゆえ、この記者は、偶然のきっかけから自分のアパートメントに泊めた若い女性が、大使館を抜け出した王女かもしれないと気づいたときに、この王女を「犠牲」にして、スクープ記事を書き、アメリカへの帰国費用（「利益」）を手に入れようという悪心を起こすのである。

映画 *Roman Holiday* は、ローマ以外から来た若い男が、ローマの生活によって精神的に堕落してしまうのを描いた点で、一見共通性のあまりなさそうなフェリーニ（Federico Fellini, 1920–93）監督作『甘い生活 *La dolce vita*』（1960）とのあいだに意外な共通点を持っている。『甘い生活』の主人公も、この町の上流社会に関係するなかで、作家になる志を失い、スキャンダル記事を書く記者へと堕落した人物だった。ローマは伝統的にひとを堕落させる可能性のある都市なのである。

Roman Holiday の主人公がどのような志をもってこの町に到来したのかについては、映画のなかでふれられることがないけれども、あるいは、王女を最初に自分のアパートメントに連れ帰った場面に小さな二つのヒントがあるのかもしれない。ヒントのひとつは、アパートメントのテーブルの上に読みかけの本が二冊置かれていることである。この短いショットは、この男は堕落した生活を送っているけれどもじつは読書家だということを示すものだろう。さらに、男が読書家であることは、王女の暗唱したあまり有名でない詩（“Arethu-

sa”）が詩人シェリーの作品であることをすぐさま言い当てるという場面にも、はっきり示されている。すぐれた研究書『ローマの休日―ワイラーとヘップバーン』（朝日新聞社、一九九一）を書いた吉村英夫は、この言及は主人公のアメリカ人新聞記者を「知性と教養の身についた」人物として描くためだったと述べる（p. 77）。吉村の指摘は正しいだろう。さらにもう一歩、想像をふくらませてみるなら、この男は「アメリカン・ニューズ・サービス」のローマ特派員という身分だが、じつは、『甘い生活』の主人公とおなじく、元来は作家志望だったのかもしれない。

それはともあれ、『甘い生活』の主人公とは異なり、*Roman Holiday* の主人公の新聞記者は、「犠牲」にしようとした王女があまりに純真であるために、その純真さに打たれて堕落状態から立ち直ることができる。*Roman Holiday* の台本は、この新聞記者の立ち直りの過程が、監督と俳優とに誤解なく伝わり、結局のところは観客にも伝わるように、ト書きに明瞭な指示を与えている。

新聞記者の再生の第一段階は、じつは、右に引用した場面のなかのト書きにふくまれていた。すなわち、「王女のしたいことがすべて素朴なので、思わず少し心を打たれる a little touched in spite of himself, at the simplicity of all she wants」、というものである。新聞記者は、ここで王族一般の高慢や堕落といった先入観を修正し、また同時に、自分の心の奥にある憐れみや良心をかすかに思い出すのである。

新聞記者の再生の第二段階は、サンタ・マリア・イン・コスメディン教会の側にある「真実の口 la bocca della verità」の場面である。ここは、嘘つきの人間がこの石造りの顔の口に手を入れると手をかみ切られる、という伝承を上手に利用した名場面である。新聞記者は、王女に、石の顔の口のなかに手を入れさせる。王女

は、自分が王女であることを偽っているから、こわごわ手を途中まで入れ、いそいで抜き出す。ところが、そのあとで記者は、思いがけず、王女から、「こんどはあなたがやってみて」と反撃される。その箇所の台詞とト書きは、つぎのようになっている。

王女

〔ジョーに〕こんどはあなたがやってみて。

〔ジョーは、ほほえみが消え、落ち着かない様子。ジョーも、ためらう〕

ジョー

〔ほほえもうとするのだが、顔は真剣〕いいとも。

〔p. 134. 傍点は筆者〕

このせりふのあとで、新聞記者は、石の顔の口に手を食いちぎられたふりをして、王女をからかう展開となる。しかし、王女の台詞の直後の記者の様子からは、自分が大きな嘘をついている良心の呵責が見られる。

新聞記者の再生の第三段階は、サンタンジェロ城のすぐ側の、テベレ川の艀の上のダンス場の場面で描き出される。新聞記者は王女とこの場所に踊りに来ているのである。

王女

あなたは、まるまる一日を使って、わたしがいつもしたかったことをしてくださった。どうしてですか。

ジョー　わからないな。そうすべきだと思ったんだ。

王女　こんなに親切なひとがいるのを聞いたことがないわ。

ジョー　〔わずかに顔を横に振りながら〕なんでもないことだったよ。

王女　それに、こんなに利己心のまったくないひとがいるのも聞いたことがない（Or so completely unselfish）。

〔利己心がないといわれて、ジョーは首をうなだれる。ジョーは、罪悪感を感じる慎み（＝神からの恵み）を持っており、当惑する（Mention of unselfishness causes him to hang down his head. He has the grace to feel a guilty conscience, and he becomes embarassed）〕

〔pp. 140–42. 傍点は筆者〕

この新聞記者は、まさに利己心のかたまりとなって、王女を犠牲にしてスクープ記事を書こうとしてきたので

ある。王女は、まったく巧まずして、この男の心の核心に強烈なアイロニーを投げつけたことになる。そして、重要なのは、この男がそのアイロニーを真剣に受け止めるだけの良心をまだ備えていることである。最終的には、王女の疑うことを知らない純真な心の発したこのアイロニーが、王女への愛情と相まって、この男に、スクープ記事を書かない決心をさせることになる。

記者の再生のつぎの段階は、王女を大使館に送り届けたあと、ひとりアパートメントで夜明けのローマの町並みを眺めている場面である。ドアがノックされる。

〔……王女が戻ったのを期待して、ジョーはドアを開ける。そこにいるのは、王女ではなく、編集長のヘネシーである〕

ヘネシー

〔騒々しく〕ジョー、ほんとうか。ほんとうに手に入れたのか。

ジョー

〔がっかりして〕え、何を。

ヘネシー

王女の記事だよ。独占記事だよ。手に入れたのか。

ジョー

いや、いや。手に入らなかった。（pp. 162–64）

この段階で、この記者は、王女に関するスクープ記事は書かないことに決めてしまっている。記者会見の場での王女と記者とのつぎのやり取りは、いわばだめ押しでしかない。

イタリア人特派員　そして、国々の友好に関する見通しについて、王女様のご意見はいかがですか。

王女　わたくしはそれを全面的に信頼しております。〔用意された原稿から離れ、ジョーを見つめながら〕わたくしが人と人との関係を信頼しているのと同じですわ。

〔随行員たちは驚きの視線を交わす。王女の返答は、ジョー個人に衝撃を与える。一瞬のためらいのあとで、ジョーは発言する〕

ジョー　わが新聞社を代表して発言してよろしければ、王女様のご信頼は正当なものとなることでしょう。

（p. 178）

映画 *Roman Holiday* のなかでは、ローマという都市のなかで堕落していた新聞記者ジョーが、純真な王女との関わりのなかで好影響を受け、右のような段階を経ながら、五千ドルの「利益」（私利）を棄てて、人間

として再生する。別の言い方をするなら、この新聞記者は、王女を犠牲にして「利益」を得ようとした—王女を犠牲にすることによって“Roman holiday”を実現しようとした（“Today's gonna be a holiday”）—けれども、あやういところで踏みとどまり、“Roman holiday”にはしないことにする。映画の肝心要のポイントは、この新聞記者が、最終的に自らの意志で、“Roman holiday”の実現を断念することである。

なお、映画 *Roman Holiday* は、そのなかでのオードリー・ヘップバーンの存在があまりに鮮烈だったから、ヘップバーンの主演映画として記憶されることになったけれども、企画から封切りまでの段階では、むしろ大俳優グレゴリー・ペック（Gregory Peck, 1916–2003）の主演映画だったことは思い出してよいだろう。この映画は冒頭で、まず「主演グレゴリー・ペック presenting Gregory Peck」と画面で示し、そのつぎに「新人オードリー・ヘップバーン introducing Audrey Hepburn」と示す。いいかえれば、新聞記者が堕落から再生へ至る物語は、作成段階では、現在考えられる以上に重要だったということである。わたくしの言い方でいえば、ジョーが一旦“Roman holiday”を求めながら断念する過程が、今ふつうに捉えられるよりも重要だったということになる。

さて、映画 *Roman Holiday* のなかの王女が、随行員や大使館員たちを犠牲にしながら「娯楽」を体験する—すなわち“Roman holiday”を体験する—というのは、呉智英の指摘のとおりである。しかし、王女にとってはもっと大きな“Roman holiday”があり、王女もまた、最終的には、新聞記者ジョーと同様に、“Roman holiday”の実現を自らの意志で断念するのである。

呉は指摘していないことだが、この王女にとって何よりも重要な“Roman holiday”は、じつは、王位継承者

としての国民に対する義務を棄てて、好きになった男ジョーと結婚することである。そこには、国民を「犠牲」にして「利益」（私利）を得るという“Roman holiday”の構図が成立している。王女は、かなり早い段階からジョーに惹かれている様子だが、この男と結婚したい気持ちが示されるのは、「祈りの壁 Edicola degli ex-voto」の場面である。映画のなかでは、ローマの人々はこの壁に向かって祈り、祈りが実現した場合には小さな板を壁にぶらさげるのだと説明され、板は多数ぶら下がっているから、多くの願いが叶ったことがわかる。王女は、この壁に向かって祈り、そのあとでジョーに問われる。

ジョー
　願い事をしたの。〔王女はうなずく。〕先生にいってごらん。
王女
　〔首を横に振る〕ともかく、願いが叶えられる可能性は、ごくわずかなの。（p. 136）

王女はこの「願い」を自ら断念するのだが、そのきっかけは、サンタンジェロ城のそばの船上の乱闘のあとで戻った、ジョーのアパートメントで聞くニュースのなかのつぎの箇所である。

今晩はローマにおられるアン王女の枕元からのさらなる報告はありません。王女は、昨日、ヨーロッパ親善旅行の最終旅程のローマでご病気になられました。〔王女は聴きながら立ち上がり、窓のそばのラジオ

まで歩いて行く。ジョーは、王女に背を向けたまま、じっと立っている。王女を見ることができない〕報告がないため、ご病状が深刻だという噂になり、それが王女の国の国民に不安と心配とをかき立てています。

〔p. 156. 傍点は筆者〕

王女が国民への「義務」を選択し、ジョーとの結婚（「私利」）を断念したことは、大使館へ戻ってからの、大使とのやりとりに明瞭に示される。

大使　王女様、……二十四時間でございます……そのあいだに何もなかったはずがございません。

王女　もちろんです。

大使　しかし、国王陛下にわたくしはどのようにご説明すればよろしいでしょうか。

王女　病気になり、回復したと説明ください。

〔その場の大使、公爵夫人、将軍は、驚いて王女を見つめる〕

大使

王女様、わたくしには果たすべき義務があることをお考え下さいませ。王女様に義務がおあり……

王女

〔発言をさえぎり〕義務という言葉を二度と使う必要はありません。王家と我が国に対する義務をじゅうぶんに自覚していなければ、今夜戻ってはこなかったでしょう。〔一同、驚きのあまり、無言〕〔涙を浮かべながら〕それどころか、まったく戻らなかったでしょう。〔威厳と権威をこめて〕さあ、今日はスケジュールがいっぱいですから、みんな下がってよろしい。

〔p. 162. 傍点は筆者〕

以上の展開をふまえていうなら、新聞記者ジョーと王女とが最後に出会う記者会見の場は、ふたつの「断念」が出会う場である。ジョーは、王女を犠牲にする利益を「断念」している。王女の方では、国民を犠牲にして結婚するという利益を「断念」している。この記者会見の場は、この映画のなかでもっとも感動的な場面だが、その感動は主人公ふたりがどちらも私利を「断念」していることから生じている。別の言い方をするなら、*Roman Holiday* という映画は、ふたりの主人公がともに“Roman holiday”の実現を断念する映画なのである。

二　“Roman holiday” とトランボ

“Roman holiday”（＝他の人々の苦しみや当惑から得られる楽しみや利益）という成句がバイロンの詩句に由来していることは、すでに見たとおりである。しかし、この句のふくまれる元の詩連の内容を確認するなら、映画 *Roman Holiday* への洞察と、この映画の脚本を書いたドルトン・トランボ（Dalton Trumbo, 1905–76）への洞察とが深まることになる。

成句 “Roman holiday” はバイロンの長編詩『チャイルド・ハロルドの巡礼、第四部 *Childe Harold's Pilgrimage, IV*』（1818）の一四一連に源がある。この連は、月光のなか、廃墟となった古代ローマ帝国の巨大建築コロセウムのなかに居て、この施設でかつて殺された剣闘士に思いを馳せる内容である。少し長くなるが、“Roman holiday” のふくまれる詩連と、内容の関連する前後の詩連とを合わせて訳出してみよう。

そしてこの場には、興奮した諸国民のざわめき声があふれて
人間が仲間の人間に殺されるときに、あわれみの言葉を呟いたり
賞賛のわめき声を上げたりした。なにゆえの人殺しか。それは
血なまぐさい円形闘技場の快活な掟であっただけのこと、そして
帝国民がそれを喜んだだけのこと。構わないではないか

蛆虫たちの喉を満たすのには、どこで倒れようと同じこと
戦場も闘技場も、どちらも主役たちが腐乱する劇場なのだ

ぼくの目の前には剣闘士が倒れている。片手で身を支えて
男らしい眉は死を受け入れているが、苦痛が勝っている
垂れ下がった頭が、徐々に下がってゆく。脇腹からは、血の最後のしずくが
赤い大きな傷口から、ゆっくり減りながら、ひとつ、またひとつと
雷雨の始まりのように、重く落ちてゆく。そして、今
闘技場が彼のまわりを回り、彼は息絶えた。彼に勝利した哀れな男を
賞賛する人でなしたちの歓声は、まだ止んでいない

剣闘士は歓声を耳にしたが、聞いてはいなかった。彼の目は
遠くにいる心と共にいた。彼は失った命、大事でもない命を
思ってはいなかった。思っていたのは、ドナウ川のほとりの粗末な小屋
その小屋には自分の蛮族の子らが遊び、子らのダキア人の母親がいた
剣闘士、その子らの父親は、ローマ人の休日のために殺された
彼の血とともに、これらの思いがあふれた。彼が息を引き取ったまま

復讐はなされないだろうか。ゴート人たちよ、立ち上がれ。怒りを晴らせ

だが、殺人が血の流れを吐き出したこの場所、ざわめく諸国民が溢れて
山の水流のように、とどろき、さざめき、ぶつかり、曲がりくねった
この場所、ローマの百万人の非難と賞賛が、群衆の戯れものの剣闘士たちの
死となり生となったこの場所で、ぼくの声が大きく響く、そして星々の
弱い光が、空虚な闘技場に落ちる。椅子は崩れ、壁は歪み、回廊には
ぼくの靴音が、奇妙に大きくこだまする

〔pp. 171–72.[2] 傍点は筆者〕

コロセウムと剣闘士とを主題にするバイロンのこれらの詩行に関連させながら、映画 *Roman Holiday* とその脚本家トランボとについて考えてみると、三つのことがいえるだろう。

第一点は、映画 *Roman Holiday* に見られる興味深い転倒である。トランボは、「剣闘士、その子らの父親は、ローマ人の休日のために殺された（he, their sire,/ Butchered to make a Roman holiday」というバイロンの詩行をふまえて脚本を書いている。くりかえせば、この詩行はコロセウムで殺される剣闘士を主題にするものである。それゆえ、“Roman holiday”をテーマとするこの映画のなかでは、王女と新聞記者と写真家とによる本格的なローマ見物は、まことにふさわしく、コロセウムの場面から始まるのである。

ところで、映画のこの場面で興味深いのは、犠牲にされる存在が王女だということである。王女はコロセウムのなかを案内されるのだが、その王女は、新聞記者から犠牲（獲物）として見込まれた存在であり、写真家によって、ゆきずりの男（新聞記者）と一緒にコロセウム見物をする様子を、犠牲（獲物）として撮影される。二十世紀半ばの状況として、王族がゴシップ報道の格好の犠牲（獲物）であることは、この映画のなかでは、写真家のつぎの発言に明示されている。

ジョー、彼女は格好の獲物だぞ。王女たちを獲物にするのは、いつでもオーケーなんだ（She's fair game, Joe. It's always open season on princesses）（p. 174）。

映画 *Roman Holiday* のコロセウムの場面では、新聞記者と写真家は、彼らの正体を知らない王女に対して圧倒的に優位な立場にあり、王女はその犠牲に供されている。その状態を帝政期ローマのコロセウムとの関連で捉え直せば、新聞記者と写真家は観覧席にいて、王女は見世物として（「群衆の戯れもの the playthings of a crowd」のひとりとして）殺される剣闘士の立場にあるといってよい。

だが思い起こせば、かつて帝政期ローマでコロセウムの観覧席の中心にいたのは皇帝とその一族、いいかえれば、社会的にはアン王女の祖先にあたる一団だった。ところが、その社会的末裔である王女は、闘技場で見世物になり、社会的意味で殺されようとするのである。そこには、二十世紀における王族に関する、社会的位置の興味深い転倒が生じている。

しかし、同時に忘れてならないことがある。王女を見世物として、ゴシップの対象として—いわば社会的殺人の対象—として期待している大衆の存在である。その観点からいえば、新聞記者と写真家もまた、大衆のためにコロセウムの闘技場のなかで、王女を殺そうとして追い回す剣闘士にすぎないのである。

思い起こすなら、帝政期ローマのコロセウムは、大衆のために、無料で「パンとサーカス」のうちの「サーカス」を提供する場所だった。大衆が「サーカス」を求めることは、じつは帝政ローマ期も二十世紀も変わらない。変化したのは、「サーカス」つまり闘技場で見世物として殺される存在が、剣闘士から王族などに変わっただけである。やはり、「剣闘士、その子らの父親は、ローマ人の休日（Roman holiday）のために殺された」という状態に変わりはないのである。映画 *Roman Holiday* の最も深層にある “Roman holiday” とは、前節で注目した主人公と女主人公とにかかわるものの他に、見世物としての殺人を好む大衆にかかわるものだろう。古代ローマ帝国の大衆も、現代の大衆も、「他の人々の苦しみや当惑から得られる楽しみや利益」という意味の “Roman holiday” を求める点で変わりはないのである。

コロセウムと剣闘士というバイロンの主題設定に関して注目すべき第二点は、剣闘士の立場からコロセウムという施設を捉え直した見方の転倒である。これは今は当たり前の見方になっている。しかし、それがどれほど新奇な見方だったかは、バイロン以前のコロセウムに関する認識を思い出せば明らかになる。バイロンの百年前に、文筆家ジョーゼフ・アディソン（Joseph Addison, 1762–1719）は、コロセウムについて次のような詩を書いていた。

ローマの高らかな美が、廃墟となった建物にあるのを
見るとき、不滅の栄光が、わたしの精神によみがえり
千の気持ちが、心中でせめぎあう
円形闘技場の驚くべき高さが、眼を恐れと喜びとで満たす
この闘技場は、催し物の日には、ローマ中の人を集め
諸民族を中に収めて、なおゆとりがあった
荒く彫刻された柱は天を貫き、誇らかな勝利のアーチがここにある
ここでは、古のローマ人が不死の所行を見せ
卑しく堕落した末裔たちを叱っている[3]

〔傍点は筆者〕

アディソンは、コロセウムという建築物の巨大な規模と、それを作り上げた古代のローマ人の力量とをひたすら賛嘆し、彼の時代の衰退したイタリア人を軽蔑しているのである。アディソンは闘技場を賛美し、そのなかで行われていた血なまぐさい娯楽にも、そこで殺された人間たちにも関心を示していない。

バイロンの二十年ほど前（一七八七年）にコロセウムを見たゲーテが注目したのも、ひとつはやはりその巨大さであり、もうひとつは月光のなかでの美しさだった。コロセウムの巨大さについて、ゲーテはつぎのように書き残している。

わたしたちは夕方、まだ薄暗い程度だったので、コロセウムを訪れた。コロセウムを見ると、他のすべてのものが小さく見えるが、あまりに大きいため、心中にその像を留めることができず、実際よりも小さなものとして思い出してしまう。その場所に戻ると、コロセウムはふたたび大きなものとして姿を現すのだ。(4)

コロセウムが月光を浴びた美しさについては、ゲーテはこう書き残している。

月光を一杯に浴びたローマを歩いて行く美しさは、それを見たことがなければ、まったくわからない。個々のものはすべて、光と影の大きな塊のなかで絡み合い、巨大かつ総体的な光景だけが眼前に姿を見せる。……とりわけ美しい光景を見せるのがコロセウムである。(5)

いずれにしても、ゲーテは、かつてのコロセウムで催された見世物としての殺人には思いを馳せていなかった。

映画 *Roman Holiday* は、すでに見たように、題名だけでなく、両主人公の行動に関しても、テーマの深部についても、バイロンの「剣闘士、その子らの父親は、ローマ人の休日のために殺された」という詩行からインスピレーションを得た作品とみなすことができる。ということは、それに先だって、コロセウムという帝政期ローマの建築物に対して、単にその巨大さに感嘆し、高度な建築技術を讃え、古代文明の栄光を体現するものと見るのでなく、むしろこの施設で提供された娯楽を犠牲者の側から見直す、バイロンの視点転換がすでに

なされている必要があったということである。いいかえれば、バイロンによるこの視点変換がなければ、この映画も存在しなかったのである。

コロセウムと剣闘士とについては、さらにもうひとつ、第三点として、脚本家トランボの *Roman Holiday* 以後の活動にも関連付けてよいだろう。トランボは、よく知られているように、数年後に映画『スパルタカス *Spartacus*』の優れた脚本を書く。古代ローマ―正確にいえば帝政期に先立つ共和制末期のローマ―における剣闘士たちの反乱を描いたこの『スパルタカス』は、古代ローマ史を、円形闘技場で娯楽のために殺し合いをさせられた奴隷たちの立場から見直した作品である。いいかえれば、それはバイロンの「剣闘士、その子らの父親は、ローマ人の休日のために殺された」という詩行と同様の立場に立つ物語なのである。“Roman holiday”を批判的に描き出す点で『スパルタカス』は映画 *Roman Holiday* の延長線上にあり、トランボの思考はバイロンの思考の延長線上にある。また、この映画のなかでは、（史実どおり）スパルタクス（Spartacus, c. 107–71 BC）の率いる反乱は、ローマの指導者とその軍隊とによって鎮圧されるが、スパルタクスは奴隷たちによる反乱の最初の一歩を踏み出した先駆者として伝説化されてゆくことが暗示される。この考え方も、これから見るように、バイロンの考え方にかなり類似している。

映画『スパルタカス』のストーリーはよく知られているが、ざっとなぞっておこう。トラキア地方で奴隷として働かされていたスパルタクスは、剣闘士の養成をする人物の目にとまり、イタリア半島南部のカプアに連れて行かれて、奴隷身分のまま剣闘士の訓練を受けるが、ある機会に仲間の剣闘士たちと反乱を起こし、養成所を脱出する。彼ら剣闘士たちは、イタリア半島南部の他の奴隷たちも仲間に誘って大集団を形成し、そのな

かの男たちに訓練をほどこして強力な軍隊を作り上げ、鎮圧に訪れるローマ軍を何度か敗北させる。スパルタクスたちは、シチリアの海賊の船団を雇ってイタリアを脱出してそれぞれの故郷に帰ることを計画するが、海賊は、ローマの指導者クラッスス（Marcus Licinius Crassus, c. 115–53 BC）に買収されて船団を撤収してしまう。クラッススの率いるローマの大軍およびその援軍と決戦しなければならなくなったスパルタクス軍は大敗し、スパルタクス自身もふくめて剣闘士たち六千人は十字架刑となる。

右で、わたくしは、映画『スパルタカス』がローマ史を、ローマ人の娯楽のために殺し合いをさせられた奴隷の立場から見直した作品であることにふれた。ローマ史の見直しであることをよく表している特徴を三つほど挙げておこう。

（一）スパルタクスの反乱にふれた記述としてはプルタルコス（Lucius Mestrius Plutarchus, c. 46–120）の『対比列伝 *Parallel Lives*』がよく知られている。正統的なローマ史である『対比列伝』では、ローマの指導者のひとりクラッススを取り扱う章のなかで、その生涯のできごとのひとつとしてスパルタクスの反乱が取り扱われる。それに対して、映画『スパルタカス』では奴隷の剣闘士スパルタクスを取り扱う作品のなかの一部として対照的にクラッススが取り上げられる。すでにここには、歴史を被支配者側から見る大きな転倒がなされている。

（二）映画『スパルタカス』では、スパルタクスとその妻となる女性（やはり奴隷身分）が高潔な人物として描かれ、それと対照的に、クラッススをふくめてローマの支配層が退廃や非倫理性を特徴とする存在として描かれる。奴隷身分の人物たちが精神的には高貴であり、支配階級の人物たちが低劣なのである。さらにクラッ

ススは、スパルタクスに恐れを感じる人間として描き出される。クラッススは、カエサル（Gaius Julius Caesar, 100–44 BC）との対話のなかで、つぎのように告白する。

カエサル
　あいつを恐れているのか
クラッスス
　あいつと戦ったときは恐れていなかった。あいつを負かせるとわかっていたからだ。今、わたしはあいつを恐れている。君カエサルを恐れている以上にだ。

この映画では、社会的な支配層と被支配層とが、精神的特質の点では転倒しているのである。

（三）映画『スパルタカス』は、冒頭のナレーションで、古代文明の中心であったローマが、奴隷制度によって、内部から腐敗していたことを明瞭に指摘する。

　ローマ共和国は、文明世界のまさに中心だった。……しかし、誇りと力の頂点にあった時でさえ、ローマ共和国は、奴隷制度という致命的な疾患があった（Yet even at the zenith of her pride and power, the Republic lay fatally stricken with a disease of human slavery）。独裁者の時代が迫っていた。それは陰に潜み、出現する機会となる出来事を待っていた。

そして、映画のなかでは、元老院がスパルタクスの反乱鎮圧を求める状況のなかで、クラッススが独裁権力を手にしてゆく、という描き方がなされるのである。

ところで、映画『スパルタカス』のなかでは、奴隷の立場にある者自身が支配者たちに対して反乱の第一歩を踏み出すことがいかに大切なことであるかが、スパルタクスのつぎの台詞によって明瞭に示される。最後にスパルタクスとふたりだけ残った仲間からの問い―「スパルタカス、われわれには勝てる可能性があったのだろうか」―に対する答である。

われわれに勝てる可能性が少しでもあったのか、というのか。彼らと戦っただけで、われわれには勝ち取ったものがあるんだ。ひとりの奴隷が「いや、そうしない」というだけでも、ローマは恐れ始める。われわれは、数万人の「ノー」という集団だった（Just by fighting them, we won something. When just one man says, “No, I won’t,” Rome begins to fear. We were tens of thousands who said no）。それが驚くべきことだった。奴隷たちが土から両手を挙げるのを見たんだ、曲げていた膝を伸ばして立ち上がるのを見たんだ……

注目してよいのは、これはまたバイロンの考え方でもあったことである。バイロンは、『チャイルド・ハロルドの巡礼、第二部』のなかで、長らくオスマントルコの支配下にあったギリシア人に対して、このように批

判していた。

代々の奴隷である者たち。自らを解放したい者らは
自分で打撃を与えなければならないことを知らないのか
(Hereditary bondsmen! know ye not/ Who would be free must strike the blow?)
自分たちの右手で、征服しなければならないことを知らないのか
フランス人やロシア人が、是正してくれるというのか。まさか
彼らはなるほど誇り高い略奪者たちを倒してくれるだろう
だが、それで、自由の祭壇がお前たちのために燃え立つわけではない
奴隷へロットの影である者たちよ。それが敵への勝利か
ギリシアよ。主人を取り替えるだけのことだ。お前の状態は変わりはしない(6)

わたくしは、ここでトランボがバイロンのこれらの詩行から直接影響を受けたと主張したいわけではない。わたくしが主張したいのは、むしろ、このふたりが、支配する側ではなく支配される側に立つ人たちであり、また奴隷状態とその解決の仕方について、同様の考え方—奴隷状態からの解放のためには奴隷自身が立ち上がらねばならない—をする人たちだったということである。

トランボがバイロンと類似の思考をする人だったことは、伝説・伝承という言葉の力にもっとも重要な価値

を置く点にも見られる。

トランボが、映画『スパルタカス』のなかで、伝説・伝承をきわめて重要なものと考えていたことは、逆説的に、スパルタクスを倒したクラッススが、スパルタクスを埋葬させず、痕跡を消滅させて、伝説にさせないよう試みる点に表れている。クラッススは、スパルタクスを十字架刑に処したのちに、つぎのようにするように命じるのである。

墓を作らせてはならない。碑銘も作らせるな。死体は焼き、灰はひそかにまき散らせ。

他方、スパルタクスの妻は、十字架上で瀕死のスパルタクスに向かって、自分は子供に、父親がどのような夢を持ち、何をしたかを語り継ぐと、つまりは、スパルタクスの業績を伝承してゆくことを約束するのである。

これがあなたの子供よ。……彼はあなたのことを記憶に留めるわ。わたしが話すからよ。父親がどんな人で、どんな夢を持ったかを話すわ。

バイロンが伝説・伝承を、滅び行く肉体や、滅び行く建築物などよりも、どれほど重要なものだと考えていたかは、やはりギリシアについて書いたつぎの詩行に見ることができる。

矢は尽き、弓は折れ、逃げてゆくメディア人
それを赤い槍で追う、勇猛なギリシア人
頭上には山々、下には平野と海原
正面の死と、背後の破壊
場面はそのようだった。この地に、今何が残っているか
聖なる地面の印となり
自由のほほえみとアジアの涙とを記録する
聖なるトロフィーはどこにあるか
あるのは穴だらけの壺と、陵辱された塚だけ
その灰を、無遠慮なよそ者が、馬のひずめで蹴散らす

しかし、お前の輝かしい過去の名残へは
哀しげながら疲れを知らぬ巡礼たちが蝟集する
イオニア海の風を受けて、航海者は
戦さと歌との明るい国を、長く讃えるだろう
お前の年代記と不滅の言語は、多くの国々の
若者たちの心を、長くお前の名声で満たすだろう

（Long shall thine annals and immortal tongue
Fill with thy fame the youth of many a shore）
老いた者たちの自慢。若者たちの学習
パラスとミューズが恐ろしい物語をするとき
賢者たちは尊敬し、詩人たちは崇める[7]

〔傍点は筆者〕

ふたたび繰り返すが、わたくしは、トランボがバイロンのこれらの詩行から直接的な影響を受けたと主張したいのではない。このふたりのものの考え方、思考形態の類似を指摘したいのである。

おわりに

この拙論では、バイロンが帝政ローマ時代のコロセウムとそこで大衆の娯楽のために殺された剣闘士とに思いをはせた詩句「剣闘士、その子らの父親は、ローマ人の休日（Roman holiday）のために殺された」から取った“Roman holiday”をタイトルとする映画 *Roman Holiday* を取り上げた。わたくしの主張は、（一）この詩句そのものと映画のストーリー展開とのかかわり、（二）バイロンのコロセウム認識と映画 *Roman Holiday* とのかかわり、（三）バイロンの思考形態と映画 *Roman Holiday* の脚本家トランボの思考形態とに関連する

ものとなった。

第一のバイロンの詩句と映画のストーリー展開との関係についてわたくしが主張したのはつぎの諸点である。

（一）成句“Roman holiday”、すなわち、「他の人々の苦しみや当惑から得られる楽しみや利益」に関して、「娯楽」だけでなく「利益」にも注目すべきである

（二）主人公の新聞記者ジョーは、他人（王女）の犠牲から「利益」を得ようとする意味での“Roman holiday”を過ごそうとする

（三）女主人公の王女は、他人（随員や大使館員）を犠牲にして「娯楽」を得ようとするだけでなく、他人（国民）を犠牲にして「利益」（王位継承義務の放棄とジョーとの結婚）を得ようとする意味でも、“Roman holiday”を過ごそうとする

（四）これらふたつの“Roman holiday”が同時に進行するのだから、*Roman Holiday*はまことに適切なタイトルである

（五）ジョーも王女も、最終的に“Roman holiday”の実現を自分たちの意志で断念し、その断念にこの映画の感動がある

第二のバイロンのコロセウム認識と映画*Roman Holiday*とのかかわりについて主張したのは、つぎの四点である。

（一）バイロンがコロセウムをそこで娯楽のために殺害された奴隷（剣闘士）の視点から捉え直したのは、それ以前にない見方の新奇な転倒だった

（二）バイロンによる見方のこの転倒、すなわち、「剣闘士、その子らの父親は、ローマ人の休日（Roman holiday）のために殺された」という詩句がなければ、それを発想の源とする映画 *Roman Holiday* も存在しえなかった

（三）映画のなかでは、王女が、帝政ローマ期に皇族のいた観客席でなく、コロセウムのなかで殺される剣闘士の位置に転倒している

（四）王女のスキャンダル（社会的殺害）を「娯楽」として期待する大衆は、帝政ローマ期のコロセウムで剣闘士の殺し合い（“Roman holiday”）を求めた大衆と変化がない

第三に、バイロンの思考形態と映画 *Roman Holiday* の脚本家トランボの思考形態とについて指摘したのは、つぎの三点である。

（一）古代ローマを、支配されていた奴隷（剣闘士）の視点から見直す点が共通している

（二）奴隷状態からの解放のために、奴隷自身が立ち上がらねばならないと考える思考形態が共通している

（三）伝説・伝承という言語の力に最大の信頼を置く考え方が共通している

注

（1）『cine-script book ローマの休日』マガジンハウス、1992。なお、本拙論中の訳文はいずれも拙訳である。

（2）J. J. McGann ed, Lord Byron, *The Complete Poetical Works, vol. II: Childe Harold's Pilgrimage*, Oxford: Clarendon Pr., 1980.

（3）“A Letter from Italy, to the Right Honourable Charles Lord Halifax, in the Year MDCCI,” in *The Works of Joseph Addison, vol. VI*, Lonon: George Bell & Sons, 1909. p. 34.

（4）A. Beyer & M. Miller eds., Johann Wolfgang Goethe, *Italienishe Reise*, München: Carl Hanser, 1992, p. 158.

（5）*Italienishe Reise*, p. 201.

（6）*Childe Harold's Pilgrimage*, p. 69.

（7）*Childe Harold's Pilgrimage*, pp. 73–4.